

パリ第7大学ワークショップおよび特別講演会報告

講師：細川英雄先生

根来良江（パリ第7大学日本語講師）

バカンスも明け、新年度はじめの、9月2日（於パリ第7大学）、6日（於パリ日本文化会館）の両日、早稲田大学の細川英雄教授を講師に、講演会が開催された。

細川先生が現在早稲田大学の日本語研究教育センターで担当されている授業の中に「総合」というタイトルの授業がある。これは細川先生の言語教育理論をそのまま体現したような画期的な授業であるが、実はこの理論に基づき、9月はじめにパリ第7大学の学生を対象に1週間にわたってワークショップが行われた。講演会はこのワークショップの合間に行われ、講演会の1日目には、これらの活動の前提となる理論的枠組みについて、そして2日目には、主にその実践面についてお話し下さった。講演会のテーマは、それぞれ「日本語教育と日本事情 - 言語文化教育の意義と問題 - 」、「ことばと文化を結ぶ日本語教育 - 総合活動型言語学習の理論と実践 - 」である。報告者は、細川先生ならびにパリ第7大学の島先生に特別ご理解を得て、パリ第7大学でのワークショップにも参加させていただいたので、その感想も含めて、以下、先生のハンドアウトにそって報告したいと思う。

「日本語教育と日本事情 - 言語文化教育の意義と問題 - 」(9月2日の講演会より)

今日、現場で「日本語教育」と「日本事情」といえば前者を言語の教育（日本語の語彙・文法・発音・表記の知識・能力）後者を文化の教育（日本の社会・文化の知識・情報）としてとらえるのが一般的理解だろう。テーマにもある「言語文化教育」というのは先生がこれらふたつを結び、命名されたものである。では、このふたつを結びつけるとはどういうことなのか、またどう結んだらいいのか。この日はこれらふたつの関係を歴史的にさかのぼっておさえ、そこに何が見えるか、ということでお話し下さった。

まず年代として1960年代から現在をとりあげ、この間に「日本語教育」と「日本事情」のタイプがどう変遷したかを考えると、この時代は、60年代から70年代（ ）80年代（ ）そして90年代以降（ ）と、大きく3つに分けることができる。以下それぞれを見ていく。

60年代から70年代：主に「何を」教えるかという教育内容に注目した時代。言語の教育は「日本語学」として体系としての知識を伝えることを目標に行われていた。そのため、「日本語の文法をどう説明するか」が中心課題であった。また、文化教育としては「日本学」があり、日本に関する専門知識をどう教えるかが注目された。学習者のニーズは「日本に関する専門的な研究をしたい」というものであった。この時代、言語教育、文化教育は関係なく別々に行われていた。

80年代：「どのように」教えるかという教育方法に注目した時代。言語教育では「日本

語」の教育としての側面が注目されはじめ、コミュニケーション能力を獲得するのが目的とされはじめた。文化の教育として「日本事情」という言葉が広く使われだしたのもこの年代である。ここでは日本の社会・文化について、教養的知識を得ることが目的とされた。学習者のニーズは「日本に関する一般的・教養的な知識を得たい」等で、一般的なことを広く浅く学ぶため、効率性、円滑性、到達性などが重視された。言語教育はこの時代、知識重視から能力重視へと移行してきた。文化教育ではなお知識重視にとどまっているが、内容的には専門的なものから一般的な行動様式へと変化があった。

90年代以降：「なぜ」教えるかという教育関係に注目しはじめる。ここでは教室内における教師と学習者の関係、言い換えれば、なぜ、教師が学習者に社会・文化を教えなければならないのか、ということにも考えが及ぶ。相互性・協働性（ひとつのものをいっしょに作っていく）・合意性（合意のもと何かを教室活動として行っていく）が重視され、ことばと文化の統合が見られるようになった。細川先生が自らの立脚点としていらっしゃるのはここである。ことばと文化は統合され、「言語文化教育」が行われる。ここでの目的は「問題発見解決能力」の開発であり「文化能力」というものが考えられる。

以上年代別に3つのタイプについて説明して下さったが、前時代のものの反省として次のものがおこってくるため、完全に前のものが次のものにとって代わるわけではなく、現在もなおこの3つは共存している。ただ、教師として自分はどの立場に立つのか、そしてそれはなぜなのか、これをはっきりさせることが大切、とのことであった。

次に先ほど言及した「文化能力」とは何のことかについてお話があった。これを考えるには「社会」をどうとらえるか、また「文化」の境界とは、そして「文化」はどこにあるのかについて考えていく必要がある。

まずひとつめの「社会」だが、これを考えるとき、我々は個人<家族<地域<民族<国家<地球といった「単位」を考えがちである。しかし「社会」という枠組みがあってその中で個人が生きているわけではなく、実は我々は「個人」の認識・価値観による、イメージとしての「社会」の中で生きているといえる。これは今までのとらえ方をくつがえす新しい視点といえるが、確かに個人がどんな社会イメージを持つか、それによって行動がなされていることを思えば納得のいくとらえ方である。これによると例えば日本社会に住んでいる人はみな同じ、とはいえないことになる。さて、そうなると次に「文化」はどのように捉えたらいいのだろうか。「社会」をこのように考える以上、「社会・文化」をセットとして体系化してとらえることは不可能になる。教科書に出てくるような“平均的日本人”としての　　さん、つまり「日本人」の行動様式・思考様式は個と個のコミュニケーションでは意味を持たなくなってくる。コミュニケーションで重要なのは、社会集団「傾向」の「解釈」としての「文化論」を知ることではなく、個と個が相互に交流しあうことである。個人の顔が見えてこないようではコミュニケーションは確立しない。たとえば、我々は「日本人だから」「フランス人だから」友達になるわけではない。

それでは「文化」はどこにあるのだろうか。仮説として先生は次のことをあげて説明され

た。「言語能力」という場合、「言語」に能力があるのではない、なぜなら「言語」は主体になりえないから、ということを考えれば、「文化能力」ということを言う以上、「文化」は「社会・集団」の中にあるのではない、集団は能力になりえないから、ということがいえる。「文化」とは個人一人一人の中にある認識・判断・表現の総体であると同時にその個人の思考・表現の様式や能力である。つまり、「文化」は「個人」の中にある、ということになる。「文化能力」の主体は「学習者」にあるのである。

「文化」の認識主体を学習者自身とすると、おのずから、学習者の対象認識とその言語化が注目される。個と個のコミュニケーションでは「個の文化」としての自己の立場を形成していく必要がある。ある個人が何かを見て、認識し、思考し、表現をする。この連鎖を教室活動で作っていくこと、これこそが、「文化能力」を形成していくことではないか。ではどうやって、教室活動でその場を提供するか。これを実践しているのが、今回のパリ第7大学でのワークショップの原型である、細川先生の早稲田での「総合」での授業なのである（詳しい内容については後述の6日の講演内容報告参照のこと）。

今までの日本語教育・日本事情教育というふたつでセットのやり方をこえ、こうして先生の提唱されている「言語文化教育」が生まれた。今までのいわゆる日本文化の知識を表面的に学ぶような「日本事情」は解体し、その上にくるものとして「言語文化教育」は存在する。今までは日本事情としては、例えば「歌舞伎」など主に教える側が選んだ事項が教えられていたが、そうではなく、「なぜ」自分（学習者）が歌舞伎について学びたいのか、それを学習者が自分で考えて表現できる能力を日本語教育で培うべきではないのか、というのが先生の立場である。「日本語教育」とは自分の言いたいことを自分で相手に表現できるようにすることであるのだから。これは今ある、傾向・特徴を知るものとしての「文化論」を否定するものではない。ただし、それのみを知っていてもコミュニケーションはできない。いわゆる「文化論」をコミュニケーションの入り口として身につけている必要はないのである。先生のおっしゃる「言語文化学習」とは、思考（こころ）と言語（かたち）の往還により、対象と自分の関係を語り、他者との異なる価値観を認め合い、他者と共生していくための、世界中のどんな社会でも暮らすことのできる「強固で柔軟なアイデンティティ」づくりを目指したものである。

「ことばと文化を結ぶ日本語教育 - 総合活動型言語学習の理論と実践 - 」(9月6日の講演会より)

先生が実践されている「総合活動型言語学習」では次の3つの考え方を重要視している。「学習者は、自ら行動し、他者との相互的協働行為を遂行する存在である」「学習者の言語文化学習は、必ずしも右肩上がりではない」「学習者は、常に一人の人間として尊重される」。ひとつめの考え方は、学習者は意思を持っている存在であり、他者とコミュニケーションしあって学習する、とも言い換えられるが、これはつまり学習者自身が考えようとしな

限りこの教育は進まないことを意味している。ここから学習の主体を学習者自身と位置づける必要性が生まれる。

それではこの「学習者主体」の日本語教育とはどういうものであるのか。そこでは与えられたものをこなす、覚えるといった教材中心読解型の学習ではなく、自分の「考えている」ことを表現する学習が実践される。先生はこのような学習を「問題発見解決学習」と呼ばれている。この具体的な実践例として、早稲田大学の「総合活動型言語学習」の中で先生が担当されている「レポートを書く」という聞く・話す・読む・書くの総合活動型コミュニケーション活動がある。これは週に一度、昼休みをはさんだ3時間の授業で、14週にわたって行われる。また、授業には早稲田の院生もTAとして参加している。なお、今回のパリ第7大学のワークショップはこれをもっと短期間で行ったものである。この授業は以下の3つの柱を持っている。

テーマを自分の問題としてとらえられるか（ステレオタイプの剥ぎ取り）

インターアクションと自己相対化 インタビュー・ディスカッション・相互評価を通して

他者を説得し納得させるための論理と一貫性（他者と共有する論理の獲得）

講演会では、上記3つの柱が実際にどのような流れで実践されていくのかをこの授業の様子をビデオに収めたものを流して紹介してくださったので、その流れを以下まとめてお伝えしたい。

- 1) 動機メモづくり(1~3週目): 各自レポートのテーマを決める。タイトルは「と私」とつける。そしてタイトルをそれに決めた動機「私にとってその問題はどういう意味があるのか」を800字位にまとめる。これは、あとで他の人とディスカッションを行う時に必要になってくる自分の考えの立場、立脚点をここではっきりさせるという意味を持つ。
 - 2) ディスカッション(4~6週目): 自分の考えについて他人(1~2人)と深くゆっくり意見を交換する。
 - 3) 話し合い(6~8週目): ディスカッションの結果をクラス(グループ)に帰って報告し意見をもらう。これはインターアクションの効果をどのように自分の中で受け止めていくか、自分にとってこのディスカッションが何だったのかを考えるきっかけとなる作業である。
 - 4) 結論(8~10週目): もらった意見を参考に結論をまとめて発表する。自分の立場を再確認し、意見をまとめる作業。
 - 5) 相互自己評価(10~12週目): 2グループ合同でそれぞれのレポートを評価し合う。
- なお、この授業の成績だが、出席点(3分の2以上)、レポート提出、最後の総合評価に出てコメントすること、の3つをおさえれば、大体70~80点はとれるそうである。また、文法的な面では、直接訂正(「この表現は間違っているからこう直しなさい」)は行わず、やりとりの中で間接訂正(「この意味が良くわからないんだけど?」)が頻用される。レポ

ートについては、構成のアドバイスはしても、内容についての直しは行わない。学習者が使いたいと思う単語は学習者自らが辞書でひき、また使いたい表現も学習者から質問があれば、手助けする。最終的なレポートの字数は中級で 8,000~10,000 字位であるということだ。

以上、細川先生の言語教育理論と、それを実践に移された授業の流れをご紹介したが、おそらくまだ半信半疑の方もいらっしゃるだろう。理論はやはり実践があってはじめてその輪郭をあらわしてくるわけだが、私自身お話をうかがってなるほどその通りと思ったものの、今回ワークショップに参加し、自分の目で見てみるまでは、先生の理論に基づくこの授業がいかに大きな意味を持っているかがわかっていなかった。そこで最後に、今回ワークショップに参加させていただいた時の感想をお伝えしておきたい。

今回のワークショップは毎日午前 10 時から 12 時半まで、6 日間続けて行うとはいうものの、本来なら 14 週の授業を 1 週間に縮めたものであり、果たしてそれで成果があがるのかどうか疑問であった。しかし、1 週間たってみて確かに結果が出ていること、学生からの良い手応えがあったことに驚いた。これは参加した学生と話してみても明らかであった。結構ハードな一週間であったが、課題をこなしきちんについていけたことにも学生自身満足していたようである。またディスカッションについてだが、アシスタントとして参加し、その相手をつとめるということは予想していたよりはるかに気力体力を消耗するものであった。というのも、他人からの意見を考えるにあたって、自分自身を振り返ってみることが常に要求されるからである。この時点で、これはすでに日本語の問題ではなく、お互いの関係は教師と学習者をこえていると感じた。とにかく他人との意見交換は中々辛い作業であり、これは、お互いの信頼関係が成り立っていないと出来ないとの説明があったが、まさにその通りであると感じた。今回のセミナーで印象的だったのは、授業に参加している人がみな当然のように「学習者主体」、学生をひとりの人間として尊重しているということであり、それはディスカッションの際の言葉、反応からも伺えた。こういうことは相手に伝わるものなのだろう。この雰囲気のおかげでディスカッションはどんどん深まっていた。こういう意味でも、グループにディスカッションの相手として参加する人は、理論もしっかりわかっている必要があると感じた。今回のセミナーの成功は、早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化研究室の、すでに経験のある院生の方々が TA として授業に参加していらしかったことによるものも大きいと思う。学生が書いたアンケートの中に来年もまたこのセミナーをやってほしいという希望があったが、これだけの人員の確保は大きな問題であろう。これがどの機関でも可能かといえば、レベル、クラス構成、その他の要因から、これと同じ形で授業が行えるのはまれだと思うが、細川先生の言語教育理論を実践に移した授業として可能なのはこの形だけではない。実際他の授業の案も出されている*。とにかく、学生の中に存在している力、これはすでに会得した日本語の知識という意味ではなく、その人となりをなしているものという意味だが、これを信じて、それを活かすような授業を行った時、思った以上の反応がかえってくるものだということを実際

にこの目で見られたこの一週間は、自分の態度を振り返ってみるのにも大変貴重なものであった。この機会を与えてくださった細川先生、早稲田の院生の方々、パリ第 7 大学の学生のみなさん、大島先生にこの場でもう一度お礼を申し上げたい。これを読んでくださった会員の皆様も、興味を持たれた方がいらっしゃったら、今回のセミナーの様子がネット上で公開されているので、ぜひそちらをのぞいてみていただきたいと思う。コンセプトからはじまり、セミナーの一週間を逐一追って、最後学生のみなさんの完成レポートまでが掲載された大作である。なおサイトのアドレスは以下のとおり。

<http://www.f.waseda.jp/hosokawa/>

*「総合」研究会編(2003)『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター参照

【研究室注】

なお、この文章は、フランス日本語教師会への報告として執筆されたものを、石井陽子会長の許諾を得て、転載させていただいたものです。フランス日本語教師会および石井会長に謝意を表します。